

盛岡市内遺跡群

— 平成26年度発掘調査報告書 —

宿田南遺跡 第11次

2017. 3

盛岡市教育委員会

盛岡市内遺跡群

— 平成26年度発掘調査報告書 —

宿田南遺跡 第11次

2017. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市は、北上平野を縦断する北上川と、その東西に位置する奥羽山脈と北上山地から流れ出る雫石川・中津川との合流点に位置し、雄大な岩手山や姫神山を望む約30万人の人口を抱える岩手県の県都です。北東北の拠点都市として緑豊かな環境と高度都市機能の調和したまちづくりを目指しています。

市内には旧石器時代から江戸時代まで、786箇所の変跡が存在します。その中には、国・県・市指定の史跡として保存・活用が図られているものもありますが、各種開発等によって姿を変え、消滅していく変跡があることも事実であります。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国の補助を受け市内各地の個人住宅建築にともなう調査を継続的に実施しており、当市の歴史を紐解くうえで、大変貴重な成果をあげております。

本書は、平成26年度に実施した市内変跡群のうち宿田南変跡の発掘調査報告書であります。市民の皆様の地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大なるご指導やご助言を賜りました文化庁文化財部記念物課ならびに岩手県教育委員会生涯学習文化課に対して、深く感謝を申し上げますとともに、発掘調査にご理解とご協力を頂いた地権者各位ならびに地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一

例 言

1. 本書は、平成26年度国庫補助事業「盛岡市内遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書は遺構及び遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集執筆は室野秀文、鈴木俊輝が担当し、菊地幸裕、津嶋知弘、神原雄一郎、花井正香、佐々木亮二、今松佑太、及川葉里が協力した。
3. 遺構の平面位置は、日本測地系を用い、平面直角座標X系を座標変換した調査座標で表示した。
宿田南遺跡 調査座標原点 $X - 32,000,000 = RX \pm 0,000$
 $Y + 25,000,000 = RY \pm 0,000$
4. 高さは標高値をそのまま使用している。
5. 土層図は地積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（2013小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業所発行）を参考にした。
6. 遺構の名称及び記号は次のとおりである。

遺 構	記 号	遺 構	記 号	遺 構	記 号
建 物 跡	RB	土 坑	RD	溝跡・堀跡	RG
柱 列 跡	RC	竪穴建物跡	RE	そ の 他	RZ

7. 使用した地図は国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1「盛岡」「小岩井農場」の地形図を5万分の1に縮小したものである。
8. 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。
9. 本調査の一部については、現地説明会資料等により報告しているものがあるが、本書の記載内容をもって訂正する。

10. 調査体制 -平成26年度-

【調査主体】 盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一

教育部長 鷹野 敬

教育次長 豊岡 勝敏

【調査総括】 歴史文化課 遺跡の学び館

課長兼館長 袖上 寛

館長補佐 北田 牧子

【調査】 副主幹 菊地 幸裕

文化財主査 室野 秀文 ※調査・資料整理

文化財主査 津嶋 知弘

文化財主査 神原雄一郎

文化財主任 花井 正香 (大船渡市派遣)

文化財主任 千田 和文 (再任用)

文化財調査員 鈴木 俊輝

文化財調査員 樋下 理沙

【管理・学芸】 主査 田山 淳一

文化財調査員 木幡 里美

学芸調査員 山岸 佳澄

学芸調査員 山野 友海

【発掘調査】

天沼寿子、長内理恵、熊谷あさ子、小松愛子、佐藤和子、谷藤貴子

【室内整理作業】

川村久美子、佐藤美智子

(五十音順、敬称略)

【調査協力】

岩手県教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、北夕顔瀬町第1町内会、北夕顔瀬町第2町内会、株式会社タックエンジニアリング (空中写真撮影)

目 次

序 言	
例 言	
目 次	
表 目 次	
挿 図 目 次	
写真図版目次	

I. 平成26～28年度発掘調査の概要	1
II. 宿田南遺跡（第11次調査）	5

写 真 図 版	
報 告 書 抄 録	

表 目 次

第1表 平成26・27年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第2表 平成28年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1

挿 図 目 次

第1図	地形分類と周辺の遺跡分布	3
第2図	宿田南遺跡の位置	5
第3図	宿田南遺跡地形図	7
第4図	宿田南遺跡第1次・第11次調査区全体図	8
第5図	調査遺構(1)	10
第6図	調査遺構(2)	11
第7図	出土遺物	12
第8図	柱穴断面図	14

写 真 図 版

第1図版	宿田南遺跡遠景。慶応年間の天昌寺～夕顔瀬付近
第2図版	宿田南遺跡第11次調査区オルソ画像。R E01堅穴建物跡全景、R E02堅穴建物跡全景、R E01堅穴建物跡出土鉄製品・R E02堅穴建物跡出土銅銭、R E01堅穴建物跡出土土師器甕

I 平成26～28年度発掘調査の概要

1. 平成26・27年度事業の概要

市内遺跡群 盛岡市内には、現在786箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。近年では周知の遺跡内における大規模公共事業（区画整理、道路等）、各種民間開発、個人住宅建築等の土地開発にともなう事前の発掘調査や試掘調査を毎年30件前後実施している。平成26年度は発掘調査・試掘調査（公共事業・各種民間開発・個人住宅等）をあわせて17件実施した。

発掘調査 平成26年度の国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、本調査2件である（第1表）。赤巻遺跡第3次調査では平安時代の土器焼成遺構などが確認され、平成27年度まで2ヶ年にわたる調査を実施した。報告書については平成29年度刊行予定である。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
宿田南遺跡（第11次）	盛岡市北夕顔瀬町 26-21	14.04.16～05.28	124㎡	個人住宅建築
赤巻遺跡（第3次）	盛岡市西青山一丁目 21.16.2	14.11.04～12.25	578㎡	個人住宅建築
赤巻遺跡（第4次）	盛岡市西青山一丁目 21.16.2	15.05.11～06.30	510㎡	個人住宅建築

第1表 平成26・27年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

2. 平成28年度事業の概要

発掘調査 平成28年度は、発掘調査・試掘調査をあわせて23件実施した（学術調査・現状変更除く）。このうち国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、本調査4件である（第2表）。本調査は西鹿渡遺跡第30次調査、台太郎遺跡第87・88次調査、西黒石野遺跡第14次調査で、平成28年度調査遺跡については、来年度以降に報告書を刊行予定のため、第2表に所在地・調査期間・調査面積を示すのみとした。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
西鹿渡遺跡（第30次）	盛岡市三本柳 2地割 35-17	16.04.27～05.24	73㎡	個人住宅建築
台太郎遺跡（第87次）	盛岡市向中野二丁目 37-68	16.05.16～06.03	61㎡	個人住宅建築
台太郎遺跡（第88次）	盛岡市向中野二丁目 37-68	16.05.16～06.03	61㎡	個人住宅建築
西黒石野遺跡（第14次）	盛岡市黒石野二丁目 35-32	16.12.15～12.16	36㎡	個人住宅建築

第2表 平成28年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

3. 盛岡の地形・地質

盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山(2,038m)を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地形・地質に大きく影響を及ぼしている。

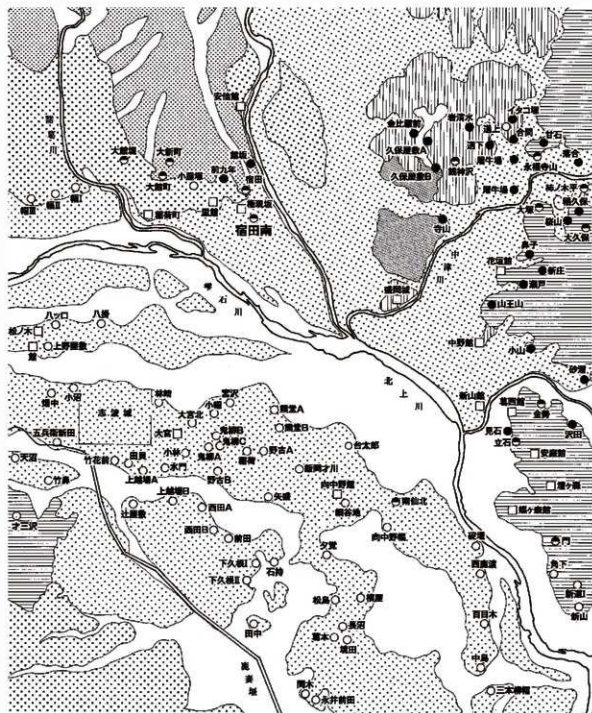
北上山地 北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、地質構造上、古生代や中生代の堆積岩および花崗岩からなる。北上山地はその主要な境界である早池峰構造帯により、北部北上山地と南部北上山地に区分される。盛岡市東部は早池峰構造帯の西縁にあたる。これらの山地縁辺には、中津川・築川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。盛岡市北東部を流れる中津川は、その最大支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川と合流する。築川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる岩神山(1,103m)の西斜面より流れ、最大支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道(宮古街道)に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開削して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。

奥羽山脈 奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれる。奥羽山脈より東流する雫石川は、雫石盆地を形成し盛岡市北の浦付近において急激に流路が峽められ、北上平野に流れ込む。雫石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なる。雫石川北岸には、岩手山起源の大石波岩層なだらな堆積物を基盤とした火山灰砂台地(滝沢台地)が広がっている。その範囲は盛岡市北部から滝沢市北部まで広範囲に及んでいる。雫石川南岸は、雫石川の流路転換によって選ばれた土砂で形成された沖積段丘が広がっている。その規模は東西約8.0km、南北3.5kmで、段丘上からは主に古代から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されている。現在は宅地造成や開場整備が進み、旧地形を留めているところは少ないが、航空写真などを見ると旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できる。

4. 歴史的環境

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、市街地から北東へ約11kmの盛岡市蔵川字外山に小石川遺跡が所在する。山岡部の小河川に臨む台地上にあり、後期旧石器時代の遺跡で木葉形尖頭器や石核、剥片、台石などが出土している。また、対岸には細石刃や石核の採集された大橋遺跡がある。

縄文時代 滝沢台地上に立地する大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺跡からは、草創期の「爪形土器」が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、前述の3遺跡以外にも大館築・館坂・前九年遺跡などで早期初頭～末葉の土器が出土している。縄文時代前期は日本列島全体で温暖化が進み、遺跡数が増加し大規模な集落が出現する時期である。しかし、盛岡周辺に限っては北上山地内に散見するのみで遺跡の数は少ない。これは、約6,000年前に起こった岩手山の山体崩壊による自然災害の影響が関連していると考えられている。縄文時代中期にな



0 1:50,000 2km

第1図 地形分類と周辺の遺跡分布

ると遺跡数は爆発的に増加し、平石川南岸の沖積平野を除く、広い地域に分布する。饗V・大館町・柿ノ木平・川目C遺跡など、主要河川の流域に大規模な拠点集落が営まれるようになる。後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿ノ木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落、芥内遺跡や湯査遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、宇登遺跡・上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認されている。

弥生～古墳 弥生時代の遺跡数は少ないが、浅岸地区の向田遺跡、塚根遺跡で前期（砂沢式期）や終末期（赤穴式期）の土器を伴う竪穴建物跡が確認されている。古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で北海道系の形態をもつ土坑墓群が検出されている。永福寺山遺跡では後北C2-D式土器と古式土師器が共存し、薬師社脇遺跡では古式土師器が埋納されていた。

古 代 古墳時代終末から奈良時代にかけて、平石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7世紀中ごろには上田殿夷葬古墳群、8世紀代には太田殿夷葬古墳群、高館古墳群などの終末期古墳が築造され、野古A遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、延暦22年（803）に陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であると同時に、北方地域との結節点でもあったが、平石川の水害を理由に、弘仁4年～5年（813～814）に徳丹城（矢巾町）へ移転している。その後9世紀中ごろより、陸奥北部の経営は鎮守府胆沢城に集約されていく。志波城東側の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幡遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在している。同様の建物跡は塚根遺跡でも確認されており、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子がうかがえる。この時期の集落は沖積面だけではなく、上猪去・猪去館・新道Ⅱ遺跡など、山麓台地や丘陵の斜面部にも拡がりみせる。10世紀後半から12世紀までの遺跡は非常に少ないが、大新町遺跡や上堂頭遺跡、高松神社裏遺跡では10世紀後半頃の掘立柱建物や竪穴跡と土器が出土している。12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は落合遺跡や塚根遺跡、稲荷町遺跡などで確認されている。また、奥州藤原氏の影響下にあったと考えられる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経塚が築かれるようになり、内村遺跡では経塚に埋納したとみられる常滑産の大甕が出土しているほか、湯査経塚からは常滑の三筋文甕、一本松経塚からは瀬美産の甕が発見されている。大宮遺跡では大澤から12～13世紀のかわらけが出土している。

中 世 鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、新波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のもと考えられている。これらの城館跡は丘陵や山頂など見晴らしのよい場所だけでなく、平野部の微高地などにも多数築かれている。現在の盛岡城の場所には南部氏の家臣であった福士氏が築いた北館（慶善館）、南館（淡路館）からなる不来方城が存在した。

近 世 現在の城下の町並みの形成は、その南部氏の盛岡城築城から始まる。九戸合戦終結後の天正19年（1591）、南部信直は帰還する豊臣軍の軍監浅野長政から不来方城において、この不来方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている（『祐清私記』）。その後、慶長2年（1597）より盛岡城の築城は始まり、寛永10年（1633）に一応の完成をみる。

（鈴木 俊輝）

瀬の片原町からこの段丘面に登り、本遺跡中央を南北に切り通し、南側の街道沿いの村は坊村と呼ばれていた(註1)。本遺跡から坊村の東西は北上川と平石川の旧河道によって浸食されている。また遺跡北側の低地はより古い時代における北上川か平石川の旧河道と推定され、本遺跡から坊村の段丘は周囲から独立した地形になっている。本遺跡の北西部の住吉神社には市内住吉町の住吉神社の故地と伝えられている。この神社は盛岡砂子(屋川生甫1874)によれば安倍氏討伐の時源頼義勧誘と伝承されている古社であるが、寛政7年(1795)ごろ盛岡城下の藤ヶ森(住吉町)に遷座し、現在に至っている。

2. 調査内容

(1) これまでの調査

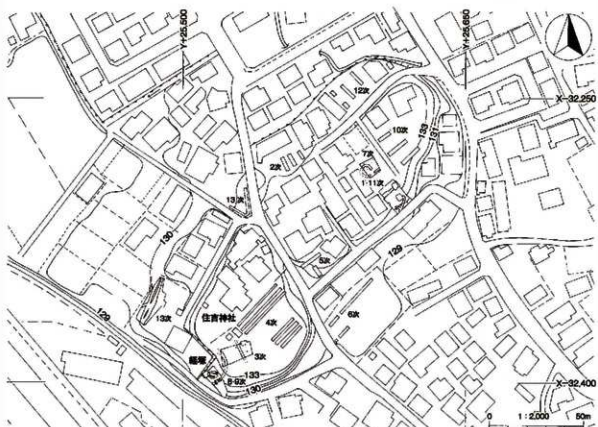
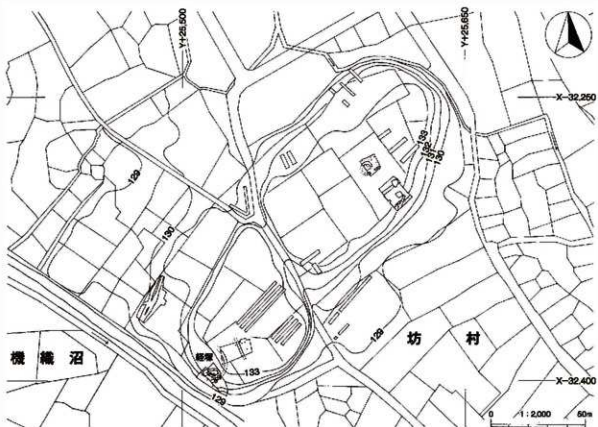
昭和61年(1986)の宿田南遺跡第1次発掘調査は今回の調査区北西側で実施され、時期不詳の柱穴群と溝1条が調査されている(盛岡市教委1987)。その後平成6年(1994)の第3次調査は遺跡の西部で実施され、時期不詳の溝と柱穴が確認されている。平成10年(1998)の第7次調査は第1次調査の北側宅地で実施され、古代以降の円形周溝と柱穴が確認されている。平成18年(2006)から平成19年(2007)にかけて実施した第9次調査では、遺跡西端部で礫石経塚と近世墓坑群、区画溝が調査されている(盛岡市教委2010)。

(2) 平成26年度の調査

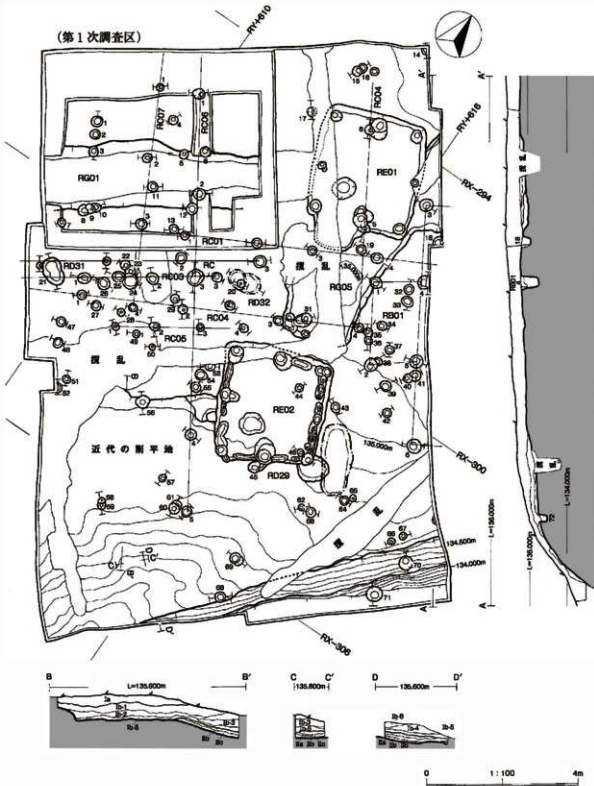
平成26年(2014)2月26日に今回調査地点に個人住宅新築のため発掘届が提出され、同年3月18日に試掘調査を実施した。その結果竪穴建物跡、柱穴、土坑が確認された。本発掘調査は平成26年4月16日から同年5月28日まで実施し、調査成果は後述の通りである。報告書作成作業は平成26年度から平成27年度末まで実施した。今回の調査区は遺跡の南東側縁辺部に位置しており、一部斜面に及んでいる。敷地の北西部は第1次調査区であり、この部分の大半は排土置き場として活用したが、調査が進むにつれて排土量が多くなり、土砂を反転しながら調査を進めた。

基本層序 表土(Ⅰa層)は黒褐色土主体で0.20m~0.30mの深さがあり、平坦部では表土直下が褐色ないし黄褐色の地山(Ⅱ層)となる。また調査区南西部分では近代以後の削平箇所があり、この部分では遺構が大きく削り取られていた。これに堆積している土層Ⅰb層は暗褐色土と黒褐色土、黄褐色土の混合土で、この地山は水性堆積の火山灰層の中に、硬質の分れ火山灰層が破砕されたような、数十cm~1m以上の塊が多く混入している。火山の岩屑なだれと土石流で形成されたような土層で、北側の滝沢大地南縁にある宿田遺跡や館坂遺跡のような、整った層序の地山とは異なる。

検出状況 今回確認された遺構はいずれもこのⅡ層を掘り込んで構築されたものであり、各遺構の掘り込み面は後世の耕作等によって失われている。さらに過去の住宅建築に伴う水道管、下水管敷設による擾乱も深く入っており、遺構の残存状況はあまり良好ではない。



第3図 宿田南遺跡地形図(上:旧地形 下:現況地形)



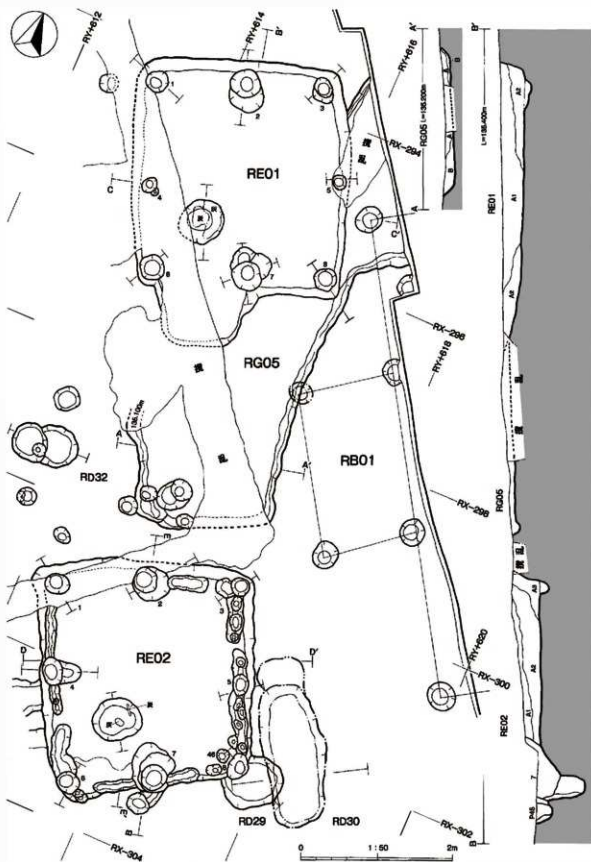
第4図 宿田南遺跡第1次・第11次調査区全体図

RE01 竪穴建物跡 (第4・5図)

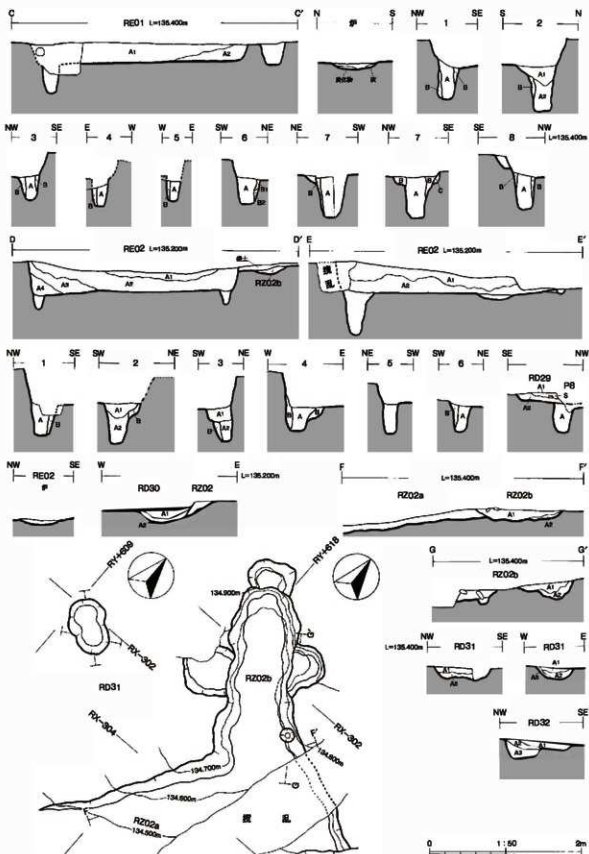
- 位置** 調査区北東部 規模 東西2.86m, 南北3.10m 棟方向 N23° W
- 重複** RC04掘立柱列跡, RG05溝跡を切る。
- 平面形** 隅丸方形プランで、竪穴の西側から出入口にかけては旧住宅の下水管によって大きく攪乱されているが、南西隅が辛うじて残存していたため、竪穴の全体形状は復元できた。竪穴の南辺西側には出入口の張り出しがあり、長さは0.80m, 幅は先端部で約1m, 竪穴との接続部分は1.35mで、南へ緩やかな坂になっている。
- 埋土** 黒褐色土に褐色土ないし暗褐色土の粒が混合する層相で、人為的に埋め戻されている。
- 壁の状態** 壁の残存高は0.25mから0.32mである。
- 床の状態** 床面は自然の硬さで平坦に造られており、硬質部分などは認められない。床面の南西部に炉があり、径0.55m～0.60mの円形で、深さ0.08mのレンズ状に掘りくぼめられている。中央部に細かな木炭粒が集まり、東側には灰が厚さ2cm程度堆積しているが、焼土の形成は認められなかった。炉の埋土は竪穴埋土のA1層に近い。
- 柱穴** 竪穴の西側から出入口にかけては旧住宅の下水管によって大きく攪乱されているが、四隅と各辺の中央に柱穴があり、計8本の柱で2間×2間の柱配置である。柱穴のうちP2とP7は柱の径が0.25m～0.27mと太く、柱穴の深さも0.55m～0.60mあって他の柱穴よりも深い。四隅のP1, P3, P6, P8は0.15m～0.18mの柱の太さで、柱穴の深さは0.30m～0.45m。P4, P5は小さく、柱の太さが0.12m～0.14m, 穴の深さが0.32m～0.38mである。柱穴の埋土は柱痕跡(A層)が黒色土ないし黒褐色土主体、柱穴掘形(B層)が暗褐色土と黒褐色土、褐色土の混合土である。
- 出土遺物** 遺物は北側のP2の柱痕跡上部から第7図4の先が尖った鉄製品が出土したほか、竪穴埋土から第7図1～3の土師器甕の体部破片が出土している。内面に刷毛目が明瞭であることから、奈良時代かやや遅る年代の可能性があり、遺構よりも年代の古い土器である。

RE02 竪穴建物跡 (第4・5図)

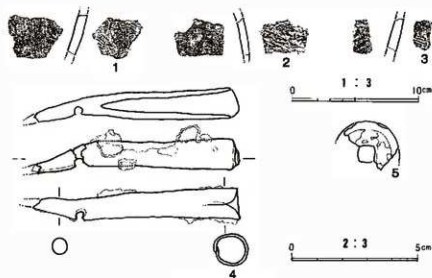
- 位置** 調査区南部 棟方向 N26° W
- 規模** 南北2.80m～3.10m, 東西2.60m～2.90m
- 重複** 南壁をP45に切られているほか、竪穴南東隅がRD029土坑に切られている。
- 平面形** 隅丸方形プランであるが、竪穴の北壁と西壁の一部は下水管敷設により失われている。位置が傾斜面にかかっており、加えて近代以後に南西側を大きく攪乱されているため、竪穴の南半部が削平されている。後述するP7から南に周溝状の溝が張り出すが、RE01竪穴建物跡のような出入口の張り出しが存在したか否か明確ではない。
- 埋土** 竪穴の埋土は暗褐色土に褐色土、黄褐色土、黒褐色土の粒や塊が多く混入する土で人為的に埋め戻されている。
- 壁の状態** 北壁は0.38m残存しているが、東西の壁は南に行くほど低くなり、南壁は東半分で0.08mほど残存のみである。
- 床の状態** 北西部分を除いた壁の内側には周溝が認められた。溝底部は起伏があり、特に東壁沿いは径0.10m～0.15mの小さな穴がつながって溝を形成している。竪穴の床面は自然の硬さであり、目



第5図 調査遺構(1)



第6図 調査遺構(2)



第7図 出土遺物

立った硬質部分はない。南西側の壁沿いには薄い張り床が認められ、周溝に切られている。床南西部の炉は径0.56m×0.67mの不整形形で、深さ0.06mのレンズ状に掘りくぼめられている。炉の底部中央にわずかな灰と、棒状に集中する木炭粒が確認された。焼土は認められていない。炉の埋土は堅穴埋土のA2層に近い。

柱 穴 柱穴は堅穴の四隅と各壁の中央にある。すべて壁の内側にあり、規模はP2とP7が大きく深く、四隅のP1、P3、P6、P8とP4とP5がやや小さい。P2とP7は柱の太さ0.23m～0.25m、床からの深さ0.53m～0.62mである。P2は柱痕跡の上部が拡がり、P7は堅穴埋土上面からの掘り込みが柱穴上部に及んでおり、柱が抜き取られている。P1、P3、P6、P8は柱の径が0.13m～0.20m、床からの深さが0.35m～0.42mである。P4とP5は柱の径が0.18m、床からの深さ0.30m～0.39mである。P3の柱痕跡は上部に抜き取り穴が及んでいる。柱穴の埋土のうち柱痕跡（A層）は堅穴の埋土に近い土質で暗褐色土に黄褐色土、褐色土、黒褐色土が混入する。柱穴掘形埋土（B層）は黒褐色土と黄褐色土混合土である。

出土遺物 出土遺物は北壁近くの堅穴埋土A2層から第7図5の銅製鏝鏡の破片が1点出土している。鏝鏡は判読できない。

RB01掘立柱建物跡（第4・5図）

位 置 RE01堅穴建物跡の東側にあり、大半が調査区外に伸びる。 棟 方 向 N315° W
平 面 形 確認されたのは建物の西側柱筋3間分と、中央から西側へ張り出す1間×1間の下屋である。
規 模 西側柱筋の総長は柱穴の芯々で6.38m。 重複関係 RG05溝にP1が切られている。
柱間寸法 北から2.04m、2.12m、2.22mである。西側下屋は側柱より1.24m出る。柱筋はやや西側へ開き、この柱間寸法は2.20mである。
柱 穴 柱穴、柱痕跡ともに円形で、柱穴規模は径0.32m～0.40m、深さは0.25m～0.78mとまちまちである。柱痕跡の径は0.20m～0.25mである。柱痕跡埋土（A層）は黒色土ないし黒褐色土に褐色土粒や塊が混入する土、掘形埋土（B層）は黒褐色土主体、または黒褐色土と褐色土の混合土である。

RC01～RC07掘立柱列跡（第4図）

掘立柱建物跡として認められないが、柱列を確認出来る遺構は7列存在する。このうちRC04柱列跡はRE01竪穴建物に切られているL字形の柱列である。東西に3間以上、南北に2間以上あり、調査区の北側、西側へ延びてゆく柱列である。またRC06掘立柱列跡は掘立柱穴1口が消滅しており、南北5間以上の柱列である。第1次調査ではRG01溝と重複しているが、新旧関係は把握されていない。この西側にはRC07掘立柱列跡があり、他に東西方向の掘立柱列にRC01、02、03、05掘立柱列跡が存在する。南北方向の柱列は北に、東西方向の柱列は西側か東側へ延びる遺構である。

RG05溝跡（第4・5図）

位置 調査区東部 規模 180m～220m 平面形 南北方向にのびる（調査区外）
重複関係 RB01掘立柱建物跡を切り、RE01竪穴建物跡に切られている。
埋土 A層が黒褐色土主体で褐色土がわずかに混入する。B層は暗褐色土と褐色土が混合している。
壁の状態 深さは0.15m～0.20mで外傾して立ち上がる。 底の状態 おおむね平坦である。

RD29土坑（第5図）

位置 調査区南東部 平面形 楕円形 規模 南北0.70m、東西0.84m
重複関係 RE01竪穴建物跡南東隅とRD30土坑の西壁を切る。
埋土 暗褐色土主体で黒褐色土、黄褐色土の粒が混入する。
壁の状態 深さは0.12mで外傾して立ち上がる。 底の状態 おおむね平坦である。

RD30土坑（第5図）

位置 調査区南東部 平面形 不整形長方形 規模 長軸1.90m、短軸幅0.84m
重複関係 RD2通路跡を切り、RD29土坑に切られる。
埋土 暗褐色土と褐色土の混合土である。 壁の状態 深さは0.28mで外傾して立ち上がる。

RD31土坑（第4・6図）

位置 調査区西部 規模 長軸0.74m、短軸0.40m～0.50m
平面形 2つの土坑が重複したようなプランであるが、土層断面では重複が確認できなかった。
埋土 暗褐色土と黄褐色土の混合土であるが、最上層には焼土粒が多く混入する。

RD32土坑（第5・6図）

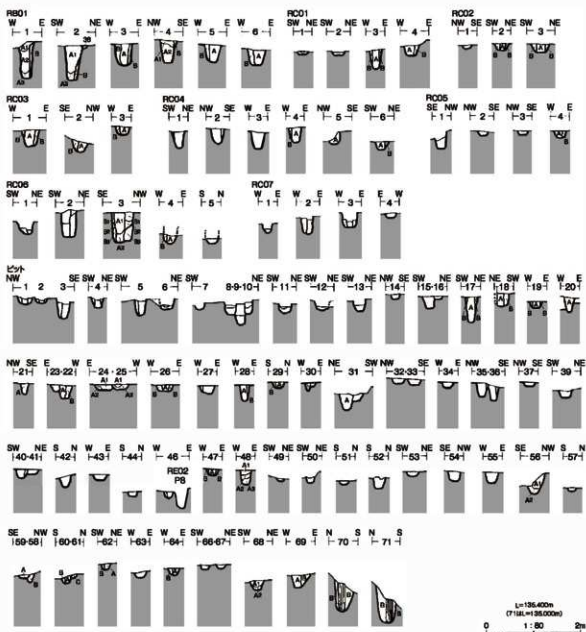
位置 調査区中央部 規模 長軸0.90m、短軸0.54m
平面形 径0.48mの円形土坑に径0.60mの土坑が重複したようなプランであるが、埋土に連続性があることから1つの土坑とした。
埋土 黒褐色土に焼土粒と褐色土粒ないし塊が多く混入する。出土遺物はないが、古代の竪穴建物のカマド煙道の煙出し部分に似ている。
壁の状態 深さは南東側0.08m、北西側0.28mで外傾して立ち上がる。

RZ01・RZ02通路跡（第6図）

位置 調査区南部の平坦部から斜面部にかけて認められた通路跡で、新田2面が確認されている。

規模 幅0.60m～1.0m 重複関係 RD30土坑とRD29土坑に掘り込まれている。

古い時期のRZ02通路跡の北端部はRE02竪穴建物跡掘り込み面よりも一層下から掘り込まれており、RE02竪穴建物跡よりも古い通路跡である（第5図、第6図）。古い時期のRZ02通路跡は斜面下の調査区南西方向から北東方向に斜めに登り、L字形に屈曲して平坦部に入る。新しい時期のRZ01通路跡は、RZ02通路とほぼ同じルートをとどるが、斜面下から小さな通路が北側へ分岐している。いずれも路幅は0.60m～1mで、調査区西端ではIIb層下の地山面がRZ02通路、IIb層上面がRZ01通路の路面に相当する。IIa層の上面も硬質であり、平面では把握できなかったがRZ01通路よりもさらに新しい通路が重複していた可能性がある。



第8図 柱穴断面図

(3) 調査のまとめ

宿田南遺跡第11次調査では、この遺跡で初めて掘立柱建物跡と掘立柱列跡、竪穴建物跡が確認された。竪穴建物跡2棟は古代末期から中世の城館跡や屋敷跡、集落跡によく見られるもので、厨川地域では稲荷町遺跡や里館遺跡、安倍館遺跡（栗谷川城跡）など、東北地方の中世城館跡で数多く確認されている。建物用途としては工房や納屋、貯蔵庫などが考えられている。本遺跡の2棟は桁行2間、梁間2間の柱配置であり、柱の大きさから南北棟の切妻屋根の妻入りで、南側妻の西半分を出入口としている。内部床面には出入口側に炉があり、ここで灯りや暖をとるようになっている。建物床面のうち、出入口側の炉の周囲1間四方の部分は土間と推定され、のこり4分の3の部分は土座か板敷きと推定できる。RE01竪穴建物跡のみ明確な張り出しの出入口が確認されたが、RE02竪穴建物も炉の位置からみて同様の出入口が存在した可能性がある。出土遺物はRE01竪穴建物からは尖頭状の鉄製品1点、RE02竪穴建物からは中国銭を写した銅銭の破片が1点出土しているのみである。銅銭の出土から時代は概ね16世紀代に位置づけられる。竪穴建物跡に先行する遺構にR G05溝跡、R B01掘立柱建物跡、R C04掘立柱列跡、R Z02通路跡がある。R Z02通路跡は、竪穴建物以前から南斜面からの登り道が存在したことを示し、掘立柱建物跡、柱列跡は竪穴建物2棟に先行する建物や区画施設が存在したことを示す。この先行する遺構群の年代がどこまで遡るのか、またこの台地上でどこまで拡がりを持つものなのかは、周辺域の発掘調査を待たなければ判明しない。土坑のうちRD31、32の2基については、遺構の形状と大きさ、埋土のあり方から、古代の竪穴建物に伴うカマド煙道の掘出しである可能性がある。竪穴部分は痕跡すら確認されておらず確定できない。またRE01竪穴建物跡の埋土からは、奈良時代かそれ以前の土師器壺体部の破片が3点出土している。調査区北側の第7次調査では径6mほどの円形周溝らしい溝が確認されている。これらの事実から、この台地上に奈良時代あるいはやや遡る時代の古墳や集落が存在し、後世の造成と削平によって、遺構の上部が失われた可能性がある。今回の調査で明確になったことは、台地上に中世後半期の建物群が営まれていたことで、これは当時の屋敷か城館の一部である可能性が高い。この台地は周囲から独立した地形になっており、城館や屋敷などが立地しやすい地形である。遺跡の北西側の低地には、かつて堀跡か小河川の跡とみられる地割が存在しており、今後は周辺地形や地割を含めた遺跡の範囲の検討、遺跡内の建物群の構成や変遷の把握が課題となろう。

註1 「慶応年間盛岡城下図」（もりおか歴史文化館蔵）

引用文献

星川生甫1874年「盛岡砂子」『南部叢書第一巻』南部叢書刊行会1927所収

盛岡市教育委員会1987年3月「宿田南遺跡」『盛岡市埋蔵文化財調査年報—昭和60・61年度—』所収

盛岡市教育委員会2010年3月「盛岡市内遺跡群—平成18・19年度発掘調査報告書—宿田南塚塚（宿田南遺跡）」

（室野 秀文）

写 真 图 版



宿田南遺跡遺景



慶応年間(1862-1868)の天昌寺〜夕麗瀬付近(城下及近在図 慶応年間 もりおか歴史文化館蔵より一部拡大)



宿田南遺跡第 11 次調査区オルソ画像



RE01 壘穴遺物跡全景



RE02 壘穴遺物跡全景



RE01 壘穴遺物跡出土鉄製品・RE02 壘穴遺物跡出土角筒



RE01 壘穴遺物跡出土土師器要

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん							
書名	盛岡市内遺跡群							
副書名	平成26年度発掘調査報告							
巻次								
シリーズ番号								
編著者名	室野秀文, 鈴木俊輝							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本官字荒屋13番地1 電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605							
発行機関	盛岡市教育委員会							
発行年月日	2017年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
しゆくたみなみいせき 宿田南遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 きたゆうがわまちょう 北夕顔瀬町 二丁目26-21	03201	LE06-21.35	39° 42' 38"	141° 07' 02"	第11次 2014.04.16 ～ 2014.05.28	12㎡	個人住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宿田南遺跡 第11次	集落	中世以前 中世	溝跡 1条 掘立柱建物跡 1棟 掘立柱列跡 7列 通路跡 2面 土坑 4基 竪穴建物跡 2棟	土師器, 鉄製品, 銅鏡				
要約	宿田南遺跡は楕円形の段丘上に立地する遺跡で、これまでに柱穴や溝跡、古代以降の円形周溝などが確認されている。本調査では中世後半期の屋敷や城館の一部と思われる建物群が営まれていたことが明らかになった。							

盛岡市内遺跡群

—平成26年度発掘調査報告書—

2017年3月24日 発行

編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605

発行 盛岡市教育委員会

印刷 株式会社 文協印刷
〒020-0835 岩手県盛岡市津志田15地割35番地5
TEL 019-638-3901 代 FAX 019-638-3144

